

今日のみ言葉 225

「義の太陽がのぼる」2013. 3. 11

わたしの名を畏れ敬うあなたがたには、義の太陽が上り、

その翼には、いやしがある。(マラキ書 3 の 20)

For you who revere my name, the sun of righteousness will rise with
healing in its wings

この世に生きる限り、さまざまの問題が生じる。私には、もう日は昇らないのではない
か、と不安を感じ、あるいは絶望的になっている人たちもいる。

2年前の東北大震災の津波、原発大事故により、肉親や家、仕事場、あるいは住み
慣れた故郷などを失った人たちのうち、相当の人たちはそのように感じていると考え
られる。とくに福島原発周辺の地域は、もう帰れないのではないかと、との疑問が大きく
ふくらんでいる方々も多いだろう。

そのような特別な災害に遭った人たちだけでなく、病気や、人間関係の崩壊、仕事の
喪失、老年の孤独と苦しみ等々によって、その魂のうちにはだんだんと闇が深まって
いるという人々も多い。

すべての人は、死に向っている。その過程で病気にもなり、確実に体力、能力は衰え、最終的にはすべて失われていく。その意味では、みな、日は沈みつつあるということが出来る。

そのようなことは人間であるかぎり、必然的であり、いかに現在有名であり、権力や金の力を誇っていてもみな失われていくということは避けることができない。

そのようなただ中であって、聖書は、日は必ずまた昇る、ということを確言している書物なのである。いかに打ち倒されても、病気の苦しみに遭おうとも、事故、災害の困難で前途が真っ暗になろうとも、それでもなお、日はまた昇る、と語りかけてくれる力をもっている。

いっさいの希望は失せたという状態、闇と混沌の状態の中であって、それでもそこに日は昇る。

それは、神が光あれ！と言われるならば、いかなる闇の中でも光が存在するようになるという神の言葉があるからである。

聖書という書物の比類のない特質は、最初から最後まで一貫して、この日はまた昇るということを語り続けているということであり、しかもそれが単なる夢物語でなく、現実に生じるという確信を与え続けてきたということである。

旧約聖書の最後に現れるみ言葉、神の定めたそのときには、日を昇らせまいとする闇の力は、すべて消え失せ、義の太陽が昇ると約束されている。そしてその太陽は、翼を持つという。それは至るところに翼を持ったかのように光を飛ばせ、必要なはたらきをするからである。

そして、その光の翼は、いやす力を持っている。その光を受けるときには、たしかに体や心—その人の何かがいやされることも確実なことである。

我が名をおそれる人には、必ずそのような新たな日が昇る。—いまから 2400 年以上昔、このことは確実に実現することとして記された。そして、その後 400 年余り後に、たしかに、新たな太陽であるキリストが現れたのであった。神を信じ、その大いなる力を畏れる人たちには確かに「日は昇った」のである。

そして、この世界、宇宙にいかなることがあろうとも、世の終わりには、ふたたび日が昇る。それが聖書の最後に記されている明けの明星としてのキリストがふたたび来られるということなのである。

「今日のみ言葉」に引用した、マラキ書の章について。

今月の「今日のみ言葉」(義の太陽がのぼる)は、マラキ 3 の 20、そして 4 の 2 という二種類の表記で書いたために、入力ミスでないかと問い合わせなどがありましたので、説明を付けておきます。

マラキ書は、一部のヘブル語の写本に、3章の19節以降を区切って4章としているものがあるために、以後の訳にもこの二通りの訳があります。現在、旧約聖書の標準的ヘブル語原典として、広く用いられている、キツテル(Rudolf Kittel)の校訂によるヘブル語原典も、3章で終り、4章というのは設けていないのです。

そして、旧約聖書の代表的なギリシャ語訳(70人訳—紀元前250年ころから訳された)では、新共同訳などと同様に、3章で終り、4章はありません。

日本では、新共同訳や、関根正雄訳がそれを受け継いでいます。カトリックのフェデリーコ・バルバロ訳、フランシスコ会聖書研究所の訳も、やはり同様に、4章は設けてありません。

さらに、カトリックの代表的英訳である、NEW AMERICAN BIBLE、NEW JERUSALEM BIBLE なども同様です。

すなわち、口語訳の4章1節以降は、そのまま新共同訳などでは、3章19節以降になっています。

しかし、ラテン語のウルガタ訳(ヒエロニムス訳)は、口語訳のように、3章の19節以降を 4章としました。

そして、英訳でも NEW REVISED STANDARD VERSION (NRS) や、New International Version (NIV) などは、4章を設けています。

このように、3章で終わるか、それとも、3章の19節以降を、4章1節として新たな章とするか、二つに別れているのです。

今回の「今日のみ言葉」では、メールでのタイトルに、マラキ3の20 と書いたのに、本文では英語聖句の後に(Mal 4:2) と書いたために、二通りの聖書箇所が表記されていたのでわかりにくくなったのです。

自然の中から 秋田駒ヶ岳から、田沢湖遠望 2012.7.20



これは、秋田県で最も高い山、秋田駒ヶ岳(1,637m)の9号目付近からの展望です。

青く澄んだ大空、そして、白い雲、静かに水をたたえた田沢湖、さらに緑なす草原状の山の斜面に咲き乱れるニッコウキスゲの群落—それらすべては、人間の手の感じられない大自然の広大さと美しさをたたえています。

大空は神の栄光をあらわし、花々は、その御手のわざを示し、湖は、私たちの魂に不可欠ののちの水を感じさせてくれます。

田沢湖は、最大深度は423.4mで日本第一位だとされています。かつては摩周湖につぐほどの透明度もあったということですが、その後、強酸性の水が流入したことで、

魚類もほとんどが絶滅し、クニマスという魚もいなくなっていたのです。しかし、2010年、山梨県の西湖にて生存個体が発見されたことが広く知られるようになりました。

ここに写っているニッコウキスゲは、東北の厳しい寒さのゆえに、冬は氷雪で覆われるような高い山にも自生しており、その強い生命力を感じさせます。

花は、ただ一輪であっても、その花びらや色、形、緑ゆたかな葉との調和などなど、私たちに何かを語りかけてきます。

他方、ここに見られるようなたくさんの花々の集りは、神の創造された自然の花園にあって、清いコーラスを歌ってるのが感じられてきます。

いかなる人間の指示も受けず、あらゆる人間的な考えや思いから完全に清められたその花たちは、天上の天使たちが地におりてきたかのような雰囲気を持っています。

青い空と湖、そして緑のなかに浮かびあがる黄色のニッコウキスゲ…こうした自然の姿とその色彩の美しさは人間が持つことのできないものであるがゆえに、強く心を惹くものがあります。(文・写真とも T.YOSHIMURA)